

ヒトは考えることはできるが、理解するには術(すべ)が要る

ヒトは考えることはできる
しかし、
理解するには術が要る
だがしかし、
意識しなければ、術は身に付かない

あなたは、自転車に乗ることができますか。また、いつごろから乗ることができるようになりましたか。あなたは、泳ぐことができますか。そして、いつごろから泳ぐことができるようになりましたか。こんなことを尋ねるのは、自転車に乗れない人たちを何人も知っているからです。また、私自身、まともに泳ぐことができないからです、自慢ではありませんが。

あるひとが、こんなことを言っていました。

学校で、たった 400 文字、原稿用紙 1 枚分の作文を書くのにも苦しんでいた人は、おそらく日本の人口の 80%以上になるのではないか。

そういうぼくも、80%のひとりである。それどころか、その後、半世紀も過ぎて、曲がりなりにもことばを商売にしている現在になっても、まだ作文をするのは気が重い。こんなことでよく生きてこられたとも思うけれど、気が重なりになり不器用に 1 文字ずつ書き足してきた。

作文だとか、文章を頼まれるとかは苦しくても、多くの人たちは、ことばを使ったり書いたりしている。それは、作文とかたちではなく、親しい人どうしの「おしゃべり」としてだったり、ツイッターやフェイスブックに書き込む「テキスト」として表現されているのだ。「作文」は苦手で、苦しく悩ましいのだけれど、表現はスイスイといくらでもできる。

作文は苦しいものだという思いが、どうしてこんなに残っているのだろうか。

人は、ほんとは、いくらでも言えるし、書けるのだ。人は、歩けるのと同じように、表現できる。踊りや歌で表現する人もいるし、無口な人の表現もある。

このことは、ほんとうでしょうか？

ほんとうに、みんなが「いくらでも」書けるのでしょうか？

ほんとうに、ちゃんと通じるように話せているのでしょうか？

「スイスイといくらでもできる」と錯覚して、意味不明なことを言っていないのでしょうか？

食べることとか歩くことは、どうも、自転車に乗れることや泳げることは根本的に違うのですが、混同してないでしょうか。もういちど、考えてみてください。

ヒトは考えることはできるが、理解するには術(すべ)が要る。

結局、ひととして、ものごとを理解する術を身につけることを、ほんとに意識してきたのか。そして、いつ、それを遣って来たのか。

ヒトには、三大欲があると言われている。

食欲
性欲
睡眠欲だ。

このうち、睡眠欲については、眠りを催すことに重点があり、ただ単に睡欲もしくは、眠欲といった方がいいだろう。

では、ヒトの基本的な欲とは、この三つだけであろうか？

じつは、そのほかに、知ること、解ることに対する強い欲求があることが、赤ちゃんの生態の研究からわかっている。

つまり、
学欲→知欲: 悟欲
というものだ。

ところで、欲とは何だろう。

生理に関するもので、排泄を欲と捉える考え方があるが、そうだろうか？
たしかに、食欲があれば排泄も欲のうち、と考えられなくもない。
果たしてそうだろうか。

じつは、欲の大きな要因のひとつに、「過剰行為」がある。

排泄のそれは、病状の変化に伴う異常状態にちがいない。それに引き換え、食欲のそれは、味覚の「興奮」によって表れる正常な脳内物質の変化だ。

これによる「過剰行為」は、脳内変化のある種の暴走といってよい。これが、本能と呼ばれる基本的な欲には、全てあてはまるのだ。学欲もその対象のうちだ。

「学欲の暴走」とは穏やかではないが、身体の保持を脅かしたり、社会的な秩序を少なからず乱すことがあれば、これも「暴走」と呼ぶに相応しい。

かくして、欲とは通常生命活動からやや逸脱した行為に至るものである。

こうして考えてみると、これらの欲を助長するにも、何らかのきっかけやエネルギーが必要なのだ。

つまり、

欲を助長することにこそ、思い付きや模倣による術(すべ=方法論)が要るのである。

だから、

欲を引き出すこと

ができなければ、

方法の指導は、ただの押し付け

に過ぎなくなる。